

[005]障害史研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/7172662>

出版情報：障害史研究. 5, 2024-03-22. Society for Disability History Studies (Shōgaishi Kenkyūkai)

バージョン：

権利関係：

編集後記

2024年正月早々、大きな天災と人災に見舞われた。このうち、能登半島地震の報道のなかで、高齢者や障害者という災害弱者が取り上げられる機会が、東日本大震災や熊本地震に際する時よりも多い印象をうける。その背景に地域性も想定されるが、そこに非常時における弱者への目配りの深度があらわれているとすれば望ましいことであろう。

そのようななか、本科研事業も最終年度を迎え、本誌も5号となった。このたびも4本の論考を掲載できた。

障害概念が成立していない前近代において、人ととしての一種の差異性も内包する障害の認識がどのように形成されてきたのかの実証は、史料の稀少さも背景に難しい。まして古代においてはなおさらであるが、そのような研究状況の変容を迫ろうとするのが、疾病（障害）観・身体観の変化から摂関院政期を疾病（障害）者と健常者を社会的に区別する認識が形成される画期と捉える藤本論考である。かたや、障害をめぐる多くの蓄積がみられる近代史において、瀧澤論考は、比較史的な観点に立ち、養生から衛生という思想文脈の中で、教育を介し国民が管理され、そのなかに障害を位置付けようとしたことを示唆する。両論考とも、広い歴史文脈のなかで精緻に、障害を検討することでみえる地平を教える。

これに対し、樋原論考と高野論考は、日本における障害史研究のトレースを試み、問題点や展望を提示した。前者は、日本における障害史研究の巨人といえる加藤康昭の「障害者問題史研究」の議論の功罪を踏まえた長い時間軸での、また多様な問題群へのアプローチを示唆する。後者は、古代から近現代にいたる多彩な障害史研究のレビューを試み、今後の研究にとって立脚すべき観点を、通史、総合史、生活史との枠組みで示そうとした。今後の障害史研究の新たな進展のためにも、歴史のなかの障害研究という視角から、先学の成果を整理することは必要なことであろう。

なお、本誌は本科研研究代表者の所属変更にもない、障害史研究会の編集・発行に変更されている。また、本誌6号（データ集）、本誌別冊（論文集『障害史へのアプローチ』[科研成果報告書]）も、同時に発刊されていることを付記しておく。（の）

障害史研究・第5号 2024年3月22日発行

編集・発行 障害史研究会

（代表者・高野信治 [九州大学名誉教授、同大学大学図書館協力研究員]
〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学大学図書館気付

印刷 城島印刷

The Journal of Disability History Studies (Shōgaishi Kenkyū) Vol.5
Published in March 2024

Edited by the Society for Disability History Studies (Shōgaishi Kenkyūkai)
Office: Kyushu University Archives
6-10-1, Hakozaki, Higasi-ku, Fukuoka, 812-8581, Japan
E-mail: takano.nobuharu@gmail.com